



あら い ともあき
新井 智明

国土交通省都市・地域整備局
下水道部下水道事業課
課長補佐



くりやま たかし
栗山 卓

山形大学大学院理工学研究科
機能高分子工学分野・教授

◆これまでの経歴は

平成10年に日本下水道事業団（JS）に入り大阪支社に配属。平成12年から建設省下水道企画課（企画調整係）、平成14年からJS東京支社計画設計課、平成17年からJS本社。前職はJS事業統括部新プロジェクト推進課です。JSでは各所属の業務以外に、JS全体の業務改善など組織横断的なプロジェクト等にも携わりました。平成20年度から現職です。

◆現在の担当業務は

下水道事業予算、事業評価、クイックプロジェクト、ストックマネジメント、コスト縮減、地域再生基盤強化交付金（内閣官房地域活性化統合事務局に併任）等。

◆本機構と行った仕事、本機構の事業活動についての意見をお聞かせください

前職以降、引き続き関わらせていただいているのが、ストックマネジメント関連です。昨年までは、JSのアセットマネジメント担当者として、「ストックマネジメントの基本的な考え方（案）」の取りまとめ等に向け、意見交換などさせていただきました。

平成20年度からは、国交省の担当として、「考え方（案）」の具体的な活用方策、下水道長寿命化支援制度の円滑な運用等、下水道機構さんとともに検討しています。また、未普及解消クイックプロジェクトでは、全国で展開中の社会実験のフォローアップなどにご尽力いただいています（本号「エンジニアリングレポート」参照）。

クイック、ストックマネジメントのどちらにも共通するのが、様々な技術と、関係者の創意工夫により、制度が運用・活用されていくという点です。今後、下水道が担うべき役割の多様化、抱える課題の複雑化を背景に、そうした取り組みがますます求められていくと考えられ、各分野の専門家が集う下水道機構の役割が、ますます重要となってきたと感じています。

◆これまでの経歴は

昭和56年に東北大学工学部を卒業し、同大学院博士課程修了後に山形大学に採用され、現在に至っています。院生時代は金属材料の高温強度（疲労・クリープ）に関する研究をしていましたが、山形大学では主に高分子材料の強度・耐久性および高性能高分子材料開発の教育研究を行ってきました。東北大学では材料強度学の創始者である横堀武夫先生に、山形大学では高分子材料強度学のパイオニアである成澤郁夫先生に出会い、恵まれた環境の中で研究ができました。

◆現在の担当業務は

研究分野は、高分子を構造材料として使用する電機・輸送機器・社会基盤関係の工業分野全般に関わります。たとえば、ガス・上下水道に広く用いられているプラスチックの管・継手についての品質向上および安全設計基準の研究は、素材・成形加工から製品形状・配管・施工設計に関係し、素材メーカー・成形メーカー・施工者あるいは使用事業者・監督官庁の産・官の関係者と一緒に仕事をさせて頂いています。また、管工機材に限らず得られた研究成果は、安全基準策定あるいは国際規格（ISO）の制定に向け積極的に取組み、産官学連携による成果を社会に還元するよう努力しています。なお、大学では、非晶性高分子のナノ構造とそれらの強度および寿命の発現機構の時空間相関に関する基礎研究も行っています。

◆本機構と行った仕事、本機構の事業活動についての意見をお聞かせください

昨年度より、「建設技術審査証明委員会」、「建設技術審査証明特別委員会」および「プラスチック製雨水地下貯留浸透施設共同研究委員会」に参加させて頂いています。いずれの委員会でも、事例にゴム・プラスチックを使用しているケースが少なからずあり、これまでの経験が活かされればと思っています。大学に身を置く者として、先輩の先生方の後を追うのではなく、その志を忘れずに仕事を進めて行くよう努めて参ります。



なか の のぶゆき
中野 順行

鹿島建設株式会社
環境本部
土壌環境グループ 次長



もりしま よしひろ
森島 嘉浩

研究第一部 副部長

◆これまでの経歴は

昭和52年鹿島建設（株）入社し、土木の現場に勤務しました。主な現場は東京港台場ずい道沈埋函と東京ガスの袖ヶ浦工場でLNGの地下タンクの築造に従事しました。前者の東京港台場ずい道沈埋函は、現在東京臨海高速鉄道の海底トンネルとなっています。5年ほど現場に従事した後、設計課に配属となり、下水道施設の設計を担当しました。

42歳で（財）下水道新技術推進機構へ席を置き、鹿島建設（株）へ戻って環境本部に配属されて現在に至ります。

◆現在の担当業務は

土壌浄化の仕事に従事しています。民間の会社が得意先で、法律を読み、土・水と戦っています。

◆本機構と行った仕事、本機構の事業活動についての意見をお聞かせください

平成9年の4月から2年間下水道機構にお世話になりました。機構内では、固有研究や広報活動などを行う「技術部」へ配属となり、季刊誌の編集などにも携わりました。

また、出身母体が建設会社ですから、社内では下水道施設といってもハードな設計ばかりを行っていましたが、下水道機構では下水の水処理（ソフト）について研究させて頂きました。そのなかでも、特に沖縄県が那覇新都心の再開発にあたり行った再生水利用の研究は、会社へ戻った後の仕事に大きな影響を与えました。

会社に戻ってすぐは環境本部水環境グループに配属となり、水処理の技術営業に10年程度従事しましたが、下水道機構で養われた知見と人脈は仕事に大変役立ちました。また、個人的なことですが、技術士の水道部門（現在、上下水道部門）にも合格することができました。

今後も、新技術の橋わたし役である下水道機構の発展を陰ながら応援していきたいと思っています。

◆これまでの経歴は

名古屋市に入庁し、当時の下水道局に配属されて以来、25年間一貫して下水道関連の道を歩んできました。新規採用で配属された下水道工事事務所に始まり、下水道計画、管渠の設計、日本下水道事業団への3年間の出向の後には主に歩掛設定や設計積算システムの開発などに携わり、この2年間は管渠の保全業務や保全計画を担当していました。

◆これまでで思い出に残る仕事は

管渠の設計は開削からシールドまで手がけてはいたのですが、平成9年度から出向した日本下水道事業団の東京支社では処理場がメインでしたので、初めはとまどったことを覚えています。

それと、何と言っても出向から戻ってからの、新潟県中越地震、能登半島地震、新潟県中越沖地震と、3回の地震で現地での被害調査に携わったことは忘れられません。能登半島地震では、発生から3時間後には名古屋市役所の本庁を出発し、被害都市を特定できないまま車を走らせるという慌ただしさでした。新潟県中越沖地震では、調査の段階と災害査定の立ち合いの計2回、現地に滞在しました。

これらどの地震でも、事を進めるに当たって、こちらから進んで現地の役所の人たちの中に飛び込み、支援に行った我々がなすべきことを、限られた時間の中で一生懸命に考えたことが思い出されます。また、現地の職員の方々も、大変忙しい中、共に議論をし、仕事を進めることでお互いの信頼関係を築いていったような気がします。

◆今後の抱負をお聞かせください

機構に来て、10年も前に出向していた先で知り合った方々と奇しくも再会したり、あるいは出張先の会合などで過去にどこかでお会いしていたことが分かって話が弾むなど、その時々のお会いを通じた連帯感のようなものがその場に生じるのが非常に心地良く感じます。今後ともこのような人と人との出会いの機会を大切にしていきたいと思っています。